

# モードは語る

中野 香織

ファッション史研究に携わってきた者としては、読後、これまで描き上げてきた歴史像が崩壊し、別の世界が立ち現れるような衝撃だった。アリソン・マッシュューズ・デーヴィッド著「死を招くファッション 服飾とテクノロジーの危険な関係」（化学同人）である。

水銀まみれの帽子、鉛入り化粧品、ヒ素入りのグリーンドレス、縫い目にひそんだシラミや細菌を運ぶ軍服、足元から死をもたらす靴墨、車輪に絡まり首を絞めるロングスカーフ、引火するセルロイド櫛……。

ぼうぜんとしたのがマッドハッター

## 死を招くファッション

# 歴史像壊す衝撃の1冊



ファッションの背後にある危険を歴史的に解説している（化学同人）

ー（いかれた帽子屋）の話である。「不思議の国のアリス」に出てくるマッドハッターは、ルイス・キャロルの想像の産物と思いこんでいた。

そうではなかったのだ。19世紀には水銀を扱うがゆえ中毒に侵され、言動がエキセントリックになっていくマッドハッターが実在した。美しい光沢を放つシルクハットは、心身を損ねながら命を削るように作っていたかもしれないと思うと、二度と「紳士必携のシルクハット」をうるわしいニュアンスで書けなくなる。

帽子屋だけじゃない。グリーンやモーブなどの新しい化学染料を使った髪飾りや手袋、ドレスを作る仕事をしてきた女性たちも、悲惨な中毒症状に苦しんだあげくに早世した。シャネル社がグリーンを嫌ったこと

には理由があったのだ。

着るほうも命がけである。化学物質や鉛が皮膚から染みこみ、健康が損ねられる。スカーフやスカートで事故に巻き込まれる。それでも美しさ、かっこよさを求めて懲りないのが人間だ。そんなファッションの最初の犠牲になるのは、底辺で働く人々だという格差も浮き彫りにされる。21世紀にも問題は尾をひく。ファストファッションを作る労働者が、低賃金で劣悪な環境で働かされていたことが暴かれたバングラデシュのラナ・プラザ崩壊事故の記憶は薄れていない。

ダメージ加工ジーンズ、カラフルなレザー、スタッズだらけのベルト。この本を読んだ後でも「クール」と思うだろうか？（服飾史家）